

【冬の地貌季語の解説】

東日本 「凍大根」（しみだいこん）

酒^{さけや}焼^やけの顔^{かほ}でては^はづす凍大根

菅原 多つを

大根が寒さのために凍^こみたのではない。寒中の寒さに曝^{さら}して水分を抜き、寒天のようにからからに干しあげたものを「凍大根」という。岩手では「すみでこ」、信州では「しみでいこ」あるいは「しみだいこ」。いずれも地の言葉で呼ばれ、親しまれている食べ物で、保存食でもある。

西日本 「藪養生」（やぶようじょう）

日^に輪^{りん}に金^{きん}のふちどり藪養生

栗原 利代子

孟宗の筍藪に藪を敷き、その上に土を入れる冬の間の作業を藪養生、あるいは藪手入れという。大阪府下の島本町辺りでは、稲刈りがすむと干藪を軽トラックに積んで、筍藪に運び、立冬過ぎの十一月から十二月にかけて藪を敷く作業を行う。春、白^{しろ}子^こと呼ぶ筍を掘り出すと、その下から土と藪とが馴染^{なじ}んだ藪の層が見られる。時雨が過ぎ、日が射し、適度の湿りと寒暖の変化がある京都や大阪の冬の天候が藪手入れを助けているのである。

出典：『語りかける季語 ゆるやかな日本』宮坂静生

『ゆたかなる季語 こまやかな日本』宮坂静生